

プノンペンの平日（４） ～カンボジア法整備支援の日常～

JICA長期派遣専門家

内山 淳

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上，2017年12月号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜（以上，2018年3月号）
- 6 平日の特別行事
 - （１）プノンペンにて（以上，2018年6月号）
 - （２）プノンペンを離れて（以上，本号）
- 7 番外編「プノンペンの休日」

前回は、プノンペンでの「特別な平日」をお伝えしました。今回は、同じく「特別な平日」の様子ですが、少しプノンペンを離れてみたいと思います。法整備支援の非日常は、別世界です。最初は躊躇してしまうことがあっても、最後には病みつきになることがありますので、ご注意ください。

6 平日の特別行事

（２）プノンペンを離れて

地方に行く

プロジェクトの活動は、基本的に、プノンペンで行いますので、仕事上で他の州に行く機会はほとんどありません。

しかし、私は、赴任前から、カンボジアにいる間に全ての州を訪ねてみよう、密かに企んでいました。せっかくカンボジアに来たのに、プノンペンしか知らないのでは、もったいないですから。

そんな思いをひた隠しながら（？）、カンボジア全土の裁判所を訪問して現地の実情を調査するという企画を立てたわけですが、幸いなことに、その企画を実現することができました。これからお伝えする内容は、この全国の裁判所を訪問して現地調査をしたときに体験したことが中心です。

各地の裁判所では、多くの裁判官と会って、裁判所に関する基本的な情報を教えてもらったり、実務上の問題点を聞いたりしました。この現地調査で得た法的な情報について

ては、別稿¹に譲りますので、ここでは、別の視点から現地調査の様子をご紹介します。

カンボジアには、全部で24州と1都があります。国土の広さは、日本の約半分です。しかし、新幹線のような高速鉄道はありません。最近では、プノンペンと地方都市とをつなぐ鉄道が何路線か開通しましたが、まだまだ長距離移動の定番手段とは言えません。ですから、基本的な移動手段は、車です。

そのため、私たちも小型のバンを手配し、毎日5～6時間ほど車に揺られて、各地を転々と移動しました。1回当たりの日程は3泊4日くらいで、約2か月間をかけて各地を巡りました。結果的に、私は、日本の全都道府県よりも先に、カンボジアの全州を制覇してしまいました。

これだけ聞くと、何だか楽しい旅行の繰り返しのように思われるかもしれませんが、道中は、なかなかハードなのです。

最初は物珍しい田園風景も、数時間続くと睡魔を呼びます。うたた寝をして、ふと目を覚まして、既視感に見舞われるような風景が続き、目的地まではまだまだ道半ば。移動途中の休憩はガソリンスタンドでのトイレ休憩くらいですが、トイレでは、虫が飛び交い、ずいぶん前から溜められているように見える桶の水で手を洗うことがあるなど、お世辞にも衛生的とは言えません。

セミナーやワーキング・グループに出席するため、各州から首都プノンペンまで出張してくる人もいるのですが、今回、その大変さを身をもって知りました。プノンペンまでは、最も遠い州都からだと、車で片道約8時間半。多くの州都からでも、約5時間です。ですから、一往復するだけでも、シリーズ物のハリウッド映画を全編見ることができそうです。

さて、やっとの思いでたどり着いた目的地でも、安心はできません。各地での宿泊先は、カンボジアの地方都市では平均的な価格、1泊15ドル程度のホテル（ゲストハウス？）です。

部屋選びは、温水シャワーがあるどうかを確かめるところから始まりますが（！）、トイレットペーパーがないなどは序の口です。室内の照明が壊れている、シャワーの水圧が低い、排水口が詰まっている、室内が臭い、室内に虫が住んでいる、ベッドに寝転がるとシーツに触れた肌がむず痒くなるなど、様々なバリエーションで私たちを驚かせてくれました。日本のホテルならクレーム殺到ですが、「所変われば」というべきでしょうか、ホテルのスタッフに伝えても、「何で気になるの？」と言わんばかりの顔です。

もちろん、日本円で1泊1500～1600円ですから、贅沢は言えませんが、もう少し「健康で文化的な最低限度の生活」を営めるホテル環境を希望したいところです。

¹ 「カンボジアの司法～始審裁判所～」(『ICDNEWS』2017年12月号)を参照。

さあ、宿が決まれば、気を取りなおして、空腹を満たしましょう。各地での楽しみと言えば、「食事」を挙げる人がいるかもしれません。

カンボジアでも、各地にはローカル食堂がありますが、シェムリアップのような国際観光都市を除けば、日本食はおろか、欧米の料理を提供するお店も見当たりません。でも、ローカル食堂のクメール料理は、素朴な味ですが、意外とクセになるおいしさです。

もともと、衛生的にはかなり疑問が残りますが、どうやら私の胃腸は繊細にできていないようで、整腸剤に助けを求めることはありませんでした。

もう1つの楽しみとして「観光」を挙げる人がいるかもしれません。

私たちは、あくまでも仕事での訪問ですから「観光」はしませんでした。次の州へ移動するときの空き時間を利用して、各地の特徴的な場所（「観光名所」とも呼びますが…）を「現地視察」しました。記念写真ではなく、「現場写真」でその様子を少しご紹介します。



【プレア・ヴィヒア寺院遺跡からの眺め】

この寺院は、カンボジア北部のプレア・ヴィヒア州にあり、タイと国境を接しています。早速、法律的な話をすると、この寺院については、タイとの間で領有権問題がありました。1962年、国際司法裁判所によって、カンボジアの領有権が認められましたが、2008年、カンボジアで2番目の世界遺産に登録されると、寺院周辺でタイとカンボジアの軍隊が銃撃戦を繰り返すなどして、多くの死傷者を出しました。

今でも、カンボジアの軍関係者が寺院内に常駐して、タイ側を監視しています。そんな緊迫感をよそに、眼下には、カンボジア国土の大半を占める広大で美しい平原が広がっています。



【サンボー・プレイ・クック遺跡】

この遺跡は、カンボジア中部のコンポン・トム州にあり、つい最近、2017年に、カンボジアで3番目の世界遺産に登録されました。アンコール・ワット遺跡よりも古い時代のものと言われています。

私たちが訪れたときは、まだ登録前でしたので、観光客はほとんどおらず、のんびりとした時間が流れていました。しかし、登録後は、多くの観光客が訪れて賑わっているとのこと。「世界遺産」ブランドは効果絶大です。遺跡に宿る神々にとっては、一夜にして有名になってしまったわけですが、急増した訪問者を見て何を思うのでしょうか。



【シェムリアップのパブ・ストリート】

日本でも有名なアンコール・ワット遺跡群は、カンボジア中部のシェムリアップ州にあります。1992年、カンボジアで最初の世界遺産に登録されました。歴史を物語る石造りの巨大寺院遺跡は、カンボジアを象徴する建造物で、カンボジア国旗にも図柄が取り入れられています。

その一方で、遺跡から車でしばらく走ると、市内中心部の繁華街にたどり着きます。多くの外国人観光客がビールを片手にくつろげる（騒げる？）「パブ・ストリート」などが有名です。世俗と神秘が共存する街です。



【ベトナム国境の街・バベット】



【タイ国境の街・ポイペト】

カンボジアは、タイやベトナムなどと国境を接していますが、幹線道路が国境を越える地域では、独特の街並みができあがっています。

例えば、ベトナム国境のバベット、タイ国境のポイペトなどは、その典型です。

どちらの街にもカジノが立ち並び、外国人しか入店できないことになっています（実際には、カンボジア人を店内で見掛けますが…）。また、多くの人が日常的に国境を越えて買出しに出かけ、大きなコンテナを積んだトラックも所狭しと行き交っています。ここに立つと、陸路貿易の要衝だということを実感します。海に囲まれた日本に住んでいた私にとっては、とても興味深い光景でした。

ところで、更に興味深いのは、通貨です。

私は、飲み物を買おうと思ってポイペトの街中にあるコンビニに立ち寄ったのですが、レジでは、ドルかバーツ（隣国タイの通貨）しか使えず、リエル（カンボジアの通貨）での支払いを拒まれてしまいました。カンボジア国内なのに自国の通貨が通用しないというのは、何とも不思議な体験でした。



【ストウン・トラエン州の瀑布】

国境といえば、カンボジアは、北部でラオスとも接しています。東南アジアを縦断する大河メコン川がラオス国境で瀑布となっていて、圧倒的な水量と音量で、見る者を魅了します。カンボジアの知られざる一面かもしれません。この豊かな自然を残しておきたいところですが、すでに周辺地域のリゾート開発が始まりつつあります。「投資にご興味がある方は、ぜひ私にご一報を。」という悪魔の誘惑に駆られてしまいそうなくらい風光明媚な場所です。



【プノンペン市内の高層ビル】



【高層ビルからのプノンペン市内の眺め】

首都プノンペンでは、マンションや商業ビルなどの高層ビルが高さを競うかのように林立していますが、これは、カンボジアの本当に極めて限られた一面です。写真でご覧いただいたように、カンボジアには様々な風景があります。

また、写真では紹介しきれませんでした。この他にも、カンボジアには、「これぞカンボジア！」と私が勝手に思っている印象的な景色が数多くあります。

「砂煙が立ち上がる赤土の直線道路」

「透き通った波が打ち寄せる白い砂浜」

「背の高いサトウヤシが点在する田園地帯」

などなどです。郷愁に浸る懐古趣味があるわけではありませんが、見ていると純粹に美しいと感じます。

さて、長々とガイドブックのような説明をしてきましたが、いかがだったでしょうか？
カンボジアへ旅行したくなりましたか？

…とお尋ねしたいわけではなく、各地を訪問するといっても、日本とはかなり様子が違うことをお伝えしたかったのですが、実感していただけたでしょうか？

もちろん、日本と様子が違うのは、道中や街並みだけではありません。

私たちは、各州に1つずつある始審裁判所（日本でいう地方裁判所に相当します。）を訪問しました。訪問先では、裁判所の所長を始めとして、裁判官や検察官、書記官の方々が総出で出迎えてくれて、私たちの様々な質問にも快く答えてくれました。

さらに、法廷などの施設も見せてくれましたが、少し驚いたのは、「会議室」です。

予算や建物の大きさなどの都合で、会議室がない裁判所も多いのです。そのため、法廷の机やいすを移動させて、急遽、「会議室」に模様替えしてくれました。日本とは違って、いすが固定式ではないためにできる荒業ですが、「法廷は厳粛なもの」という固定観念に囚われている私にとっては、天動説が地動説になるくらいのコペルニクスの転回が必要な瞬間でした。

各地の裁判所の皆さんは、日本の法律家がめったに来ない（初めて来た？）からなのか、私たちの質問に答えるだけでは物足りないようで、逆に、裁判官からいろいろと質問が飛び出しました。コペルニクスでも予想できないような方向から「ボール」が飛んでくるので、イチロー並みの守備力が必要です。

延長戦を避けるべく、「そろそろ、次の州へ移動しなければいけないので…。」と方便を使い（?）、やっと質問攻めから解放される…いや、質問に答えないのに後ろ髪を引かれる思いで、裁判所を去ることもしばしば。

とはいえ、裁判所で話を聞けば聞くほど、（日本では当たり前前提となっているインフラが十分に整備されていないことなどもあって）法的な問題以前の苦勞が多いことも分かりました。

各州内では公共交通機関がほとんど発達していないので、裁判所職員が書類を当事者に届けるのに一苦勞。

雨季になると未舗装の道はぬかるむので、当事者も裁判所職員も移動するのに一苦勞。

多くの州では弁護士がほとんどいないので、当事者は訴状を作るのに一苦勞。

裁判所は各州の州都に1か所しかないので、当事者は裁判所に行くのに一苦勞。

…挙げ始めたらきりがないくらいの「一苦勞」の数々です。

各地の様子は、事前にある程度聞いていたのですが、寄せ集めの情報で構成していた

私のイメージと比べて、実際の様子は、ずいぶんと異なっていました。正に「百聞は一見に如かず」です。

各地を訪問する現地調査は、「宝の山」の発掘作業に近いかもしれませんが。何が埋まっているのか分からないけれども、とにかく掘り始めてみれば、思いもよらない「原石」に巡り会えます。誰も知らなかった情報や初めての体験といった「原石」をしっかりと磨き上げれば、プロジェクト活動にとっての「宝石」を手に入れることができます。プロジェクト・オフィスには、そんなたくさんの「宝石」が保管されています。

もっとも、この「宝石」は、非売品ですので、現地専門家が一獲千金の夢を見ることは難しそうです。

国外に行く

あまり機会は多くありませんが、現地専門家は、カンボジア国外へ出張することもあります。

日本を知るには、日本の「外から眺める」とよく分かる場合がありますが、カンボジアも同じだと思います。他の国々の様子を知れば、それをカンボジアに反映させることができます。気付かなかった視点、他国での模範例（グッド・プラクティス）を活用すれば、よりよいプロジェクトになるはずです。

実際、隣国ベトナムに各国の現地専門家が集まり、それぞれのプロジェクトについての情報を持ち寄って話し合う機会がありました。どこの国のプロジェクトでも同じ悩みを抱えているんだなと思うような「法整備支援あるある」から、画期的で興味深い取組まで、多種多様な話題に花が咲きました。

この他にも、国外出張としては、「本邦研修」があります。これは、プロジェクトのワーキング・グループに所属するメンバーが、約2週間、日本に行って、日本の実務などを実際に見聞きして学ぶという研修ですが²、担当の現地専門家も同行します。

私は、この赴任中には本邦研修に同行していませんが、ICD教官だった頃に、本邦研修を受け入れる日本側の担当をしていました。メンバーは、お互いに熱心に議論したり、訪問先で次々と質問したりして、カンボジアを「外から眺める」ことで様々なヒントを持ち帰っていきました。

法整備支援の魅力の1つは、当たり前だと思っていた自分の世界を「外から眺める」ことによって、その世界の良さも悪さも再発見できることかもしれません。

さて、2回にわたって、「特別な平日」をお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？
今回は、「平日」というよりも「休日」ではないかというお叱りの声が聞こえてきそうですが、特別な平日の雰囲気但至少でも堪能していただけたとしたら、うれしい限りです。

² 本邦研修については、『ICDNEWS』バックナンバーを参照。デジタル版は、ICDホームページに掲載。http://www.moj.go.jp/housouken/housou_houkoku_cambo.html

今回は、いよいよ最終回です。番外編として、私たちの本当の(?) 休日を「プノンペン
の休日」と題してお伝えします。

どうぞお楽しみに。

(つづく)